

Kurt Vonnegut, Jr. or A Requiem for Children

小 武 秀 男

Kurt Vonnegut Jr. は1922年インディアナ州に生まれた。ドイツ系移民、第四世である。10年前かれはスーパーマーケットの片隅に追いやられていた。いまかれの作品は書店の正面にならべられている。かれは変らなかつたが読者の方が漸くかれに追いついて来たというべきかもしれない。いち早くかれを認めた批評家たちはヴォネガットに、SFのわくでは律しきれない倫理的な関心を指摘している。中でもグレアム・グリーンがその一人に含まれていることは興味深い。かれはエンターテインメントと、倫理的な主題を強くだした小説とははっきりと使いわけている。しかしヴォネガットの場合はこの二者がそれぞれの作品に融け合っさっている。SFの愛好と倫理的な関心と。例えば落伍兵ピリーの到達するトラルファマドール星といい、フェーリックス博士の発明するアイス・ナインといい、SFの常套的手段の一切がコミックな、しかし黙示的な終末に向って動き出していく。それはコミックであると同時にアポカリプティックな世界である。超現実のファンタジーと瞑想的な主題と、この二つのつりあいがヴォネガットの魅力を形造っている。ここでは *Cat's Cradle* と *Slaughterhouse-Five* をとりあげたい。

“Call me Johna.” *Cat's Cradle* の冒頭の一句はこの作品のスタイルを暗示している。それは臆することのないパロディを特色として旧約聖書、アーサー王伝説、トマス・ウルフやメルヴィルまで寄木細工のようにさまざまである。しかし中心的な骨組みとなっているのは *Moby Dick* である。イシメールはこの場合ポ・ライター・ジョナに転生している。この無名記者はヒロシマが固定観念になっていて、その日アメリカの科学者は何をしていたかと

いうことを本にしようと思立っている。かれはたまたま訪れた軍事研究所で最終兵器アイス・ナインの秘密に触れる。この時黒人守衛ノールズと知りあったことはかれに破滅兵器誕生の背景をさぐらせるきっかけを与える。ノールズの科白。

This here's a re-search laboratory. Re-search means look again, don't it?...How come they got to build a building like this, with mayonaise elevators and all, and fill it with all these crazy people? What is it they're trying to find again? Who lost what? 見直すこと、すなわち、洗い直し、探索のキューが出されたのである。ジョナ・ヴォネガットの洗い直しの対象となるのは二十世紀の二つの信仰、テクノロジーと宗教である。Cat's Cradle というファンタジアのロケットを飛びたさせるのは形而上的関心なのであり、科学や宗教によって人はいかに救われるか、あるいは救い得ないかということである。

Dr. Felix は天才的科学家と幼児の魂の結合したおそろべき子供、SF の用語に従うならば、ミュータントとして登場する。「神に祝福された人」を意味するこの科学家は最終兵器アイス・ナインを発明する。あらゆる水源を止め、世界を凍りつかせる氷の結晶はじつにかれの実験室一台所の鍋一の中から取り出された。フェーリックスにとってそれは遊びにすぎなかった。実験に立ちあつた科学家は「これで科学は罪を知るようになった。」と感想を洩らす。博士は 'What is sin?' と問いかえす。「この世のすべてが遊び道具となるのにどうして他に趣味をもつ必要があるでしょうか。」かれの演説は次々に開拓してゆく死の兵器を背景にして考えるとほとんどメフィスト的悪意をおびて聞こえる。

I stand before you now because I never stopped dawdling like an eight-year-old on a spring morning on his way to school. Anything can make me stop and look and wonder, and learn. I am a very happy man. Thank you.

ワーズワース的な幼児のイメージはさかさまとなって人類を破滅に導く 科学者が実は八つの子供のメンタリティに安住していたことが明らかにされる。この博士が真理の奉仕者としてノーベル賞を与えられることで 皮肉は完全なものになる。フェリックスが「神に祝福された」子供ならば人間はかれの気紛れによって森に迷いこんだ子供たちといえるかもしれない。ヘンゼルやグレーテルのように。テクノロジーを前にして無力であり機械に不安を抱いている今日の人間は正しくヴォネガットのいう「子供たち」にふさわしいといえる。「霧の中で迷った子供たち」fog-bound childこそヴォネガットの人間観の中心的イメージといえるだろう。もしかするとそれは、荒野をさまようグロスターの「これは神さまの冗談なのではないだろうか。」というつぶやきのヴォネガットのデフォルメかもしれない。

科学の世界で人間をリードしたフェリックス博士は今度は 信者のために十字架にかからうとはしないにせキリストの形をかりて再生する。ヴォネガットはこの新しい教祖の本部をカリブ海のサン・ロレンゾ共和国に置く。このちょうざめの共和国は生産指数ゼロであってあらゆるユートピア 計画のつまづきの石である。住民は途方にくれ見放された人々であり偶然によって幸うじて生きていられる。この裸の人々、無力な子供たちを前にしてボコノン教は bitter sweet lies の託直をおびて登場してくる。教主ボコノンは 信者たちに向って最初に次のように警告する。

All of the true things I am about to tell you are shameless lies.

ボコノンの教義は純然たる作りごと、a pack of lies であり foma である。人は真実のみによっては生きられない。生きる為にはさまざまの口実を必要とする。生きるためにジレンマに強いられてさまざまの価値を、愛とか純粹さとかをつくり出す。だからボコノン教はこうした価値の、やむないイリュージョンの、すなわち「嘘」の発明を第一義的に認めるわけである。これは常に「真実」を説きつづけて来た、宗教一般への優越的なフーンであろうか。大切

なことはおそらく真のシニクならば「嘘」の「発明」などという手数のかかることを口にしないということだろう。何を指して「嘘」といい何のために「発明」するのか。「嘘」を「観念」という言葉に置きかえたら話はしやすくなる。観念とは事物の世界からはなれて意識というどこにもない空間に生み出されたものであるからそれは純然たるフィクションであり、仮構のものである。それはまた人間の現実的な必要から生れたものであるからある種の薬物のように適量にとっていけば快適な日常生活を保証出来る。しかし単純でない観念もあって、ある場合には人間はその存立のために、生死を賭ける彼目に立ちいたることもある。例えば戦争という事態と「祖国愛」という観念。

多くの人が愛国の名のものに、*pro patria* の名のものに散華していった。しかし観念がほろびること、実状に合わなくなることはないだろうか。観念が古くなった時それは淘汰されることもありうる。その観念の体系が有力であればある程代替が必要になってくる。人間は偶然的な存在ではあり得ないから、生きるためには是か非でも、あらゆるジレンマをおかして美しい観念の体系を築いていかなければならない。ここで話をようやくボコノン教にもどすならばそのことがつまり新しい「嘘」の「発明」ということになるのである。

I wanted all things
 To seem to make some sense,
 So we all could be happy, yes,
 Instead of tense,
 And I made up lies
 So that they all fit nice,
 And I made this sad world
 A par-a-dise.

嘘の発明とはボコノンにとって、*making sense* ということ、納得できる意味をみつけること、を意味する。この言葉の背後にはもちろん現実の総体は不可解であるという認識がはたらいている。現実キッコウするべく観念はあまり

に観念的である。すなはち嘘であるというさめた意識がある。しかも尚、にがい真実として人間は観念なしには、嘘なしには生きられない。ポコノンはいう。the heart-breaking necessity of lying about reality, and the heartbreaking impossibility of lying about it.

現実には常に観念をはみ出すものかがあり、現実に生きるということは日々この訳のわからないものと顔を合せているということである。しかしとにかく、生きるためには、わかったふりをする、つまり自分で収支決算を合せること、自分で納得できる意味をみつけていくこと、こそ肝要である。

Tiger got to hunt,

Bird got to fly;

Man got to sit and wonder, "Why, why, why?"

Tiger got to sleep,

Bird got to land;

Man got to tell himself he understands.

ポコノン・ヴォネガットはここで今日生きるということがいかに人工的なものになりつつあるかを示唆しているらしい。この世界から確実な世界が姿を消しつつあるようである。それは普遍性という概念を可能にして来たもの、具体的にはキリスト教文明がもはや信じられなくなって来たためだろう。個人の内面についても確実な内面はない。人はみずからの主観によってしか世界像を思い描けない。その普遍性について確信がもてないまま、自らの創りだした世界像についても孤独な夢想、純粋な作りごと perfect fiction、「嘘」として提出せざるを得ない。それ故にこそヴォネガットも人間存在への関心、人間の未来についての倫理的な関心をコミックな嘘の発明という形でトウカイしているのである。

再び物語にもどるならばアイス・ナインが海に落ちた時天はヨハネの黙示録に答えるように終末の様相をみせて崩解する。すべてが終わったあとポコノンは青いコブをもつ鯨の背中をした Mt. MacCabe に登って最後の説教をもくろ

む。ボコノン山上の垂訓となるべきものが *Cat's Cradle* の終章なのである。アイス・ナインの日、ボコノンは生き残った信者たちを集め神の真の意図を告げて、かれらを集団自殺へ向けさせる。瀕死の独裁者の気まぐれが招いた事態を前にして自称ベテン師は新しい「嘘」の代替物を見つけることが出来なかったのである。森の中に迷った子供たちは本当にたべられてしまった。制度化された宗教やテクノロジーは未来に不安を抱く人間にとっては何の救いにもならない、人間は依然として霧の中で迷った子供 *fog-bound child* であるというヴォネガットのテーマがひびいてくる。信者をすべて失い、かれの属していた世界を破かいされたボコノン・ヨブはしかし神を呼び出そうとはしない。

(why go right ahead and scold Him, He'll just smile and nod.)
 神の計画はうかがいしれず、神は人間の運命の圏外にある。とすれば事態はすべて人間が自らの弱さや愚かしさによって招ねいたものと観念する他ない。ほろびるとすれば自らの愚かしさによってそうするのであるという認識に徹する他ない。人間の悲惨さを最後までわけもとうと決意することしかない。運命的必敗論者のこの決意こそ、作家としてのヴォネガットの基本的姿勢と呼ぶべきであろう。

Kurt Vonnegut Jr, 心やさしきニヒリストと称されるかれが私にとって興味があるのは戦後作家の刻印すなわち戦争という死の実験に立ちあつた人、価値の再点検を迫られた人、の内面をうかがうという意味である。宇宙あるいは「神」の前に立たされた人間存在の偶然性へのめざめ、それに対する宇宙の亦、無意味な残酷さ、こうしたことがヴォネガットの動機をなしているといつてよいかもしれない。人間についての認識とそこから発する救いへの模索がヴォネガットの道筋であったようである。かれがドレスデン経験に始めてふれたのは *Mother Night* だった。それから三つ目の作品ではじめてかれは正面切ってかれにとってのトローマ的題材をとりあげることになる。

Slaughterhouse-Five は通常の反戦小説という形式にアポカリプティックな深い感情をこめた作品である。かれがこの小説を書いた動機はほとんどノン

シャランといえる前書きにつけている。これは戦後史の繁栄の中に死者たちを埋めることの出来なかった男の物語りなのである。「生きて物語りを語ること」すなわちホレーショの役目を引きうけさせられるのは「煙草のすいすぎを気にしながら、「安逸な生活を営む」中年の作家「私」である。彼は戦争から帰って来た直後ドレスデン大火を素材にして、一編の戦争ものをかこうとした。それはただ彼の見て来たことを紙に移せばよいことのように思えた。しかし彼がそれに関する薄ぺらな本を仕上げるためには二十三年の才月を必要とした。短かい、つぶやきのような文体でつづられた小説として。深夜よっぱらって知り合いに次々に長距離電話をかける「私」の中に、序々に、あの戦争に参加したものはすべて子供十字軍のようなものでなかったかというイメージが育っていく。ドレスデン—「エルベ河畔のフローレンス」—に加えられた殲滅的な空爆がこの主題的なイメージを打ちだす撃鉄となった。目的は戦争の早期終結のため、結果たる死者の数は広島に数倍する空軍史上「未曾有の成功」を収めたドレスデン大空襲は何故か多くのアメリカ人には報らされていなかった。「私」はいわばこの伏字を掘りおこそうと決心する。ドレスデンをめぐって大統領や將軍たちは証言し、そして生存者は反証する。両者の確執はおそらく消えることはあるまい。それならば中有に落ちた死者たちはどうなるのか。十字軍にかりたてられた子供たちのように意味さえ知らずにたおれていった人々はどうなるのか。ここで「私」のテーマははっきりとヴォネガットのテーマとなる。fog-bound child は今度は愛国の名のもとに、pro patria の名のもとに、戦場に送りこまれたのである。戦後二十数年、ヴォネガットは今度こそはっきりとかれの「子供たち」への鎮魂歌をかきつけたのである。

Cat's Cradle が人類史のヴィジョンを、テクノロジーや宗教への諷刺に託したものとしたら Slaughterhouse-Five は個の運命に即して描いたといえよう。この主題にふさわしくそれは民話のスタイルをとっている。戦争という史実が民衆の真実の視点から洗い直された、ともいえる。主人公となるのは戦争にはんろうされる個の運命というにふさわしく、敗残兵ビリーピルグリムであ

る。彼は多分ハエー匹も殺せないような、100%のユーマニズムを保証できる人物である。そのかれが兵士に仕立てられて殺リクに参加させられる破目になったらどうするか。ビリーは戦場の現実を前にして茫然自失するばかりであり、彼の子供のような純粋さは周囲に何の感化も及ばさない徹底的に無力なものである。悲劇ならばカタルシスがあり、感情的崇高さがあり、主人公は一箇の人物、Character でなければならぬが、ビリーは運命にあやつられる道化、チャプリンの人物として描かれている。ヴォネガットの視線の中では世界は悲劇的というよりはむしろグロテスクであるようだ。

There are almost no characters in this story, and almost no dramatic confrontations, because most of the people in it are so sick and so much the listless playthings of enormous forces.

荒野のグロスターに、人間は神のおもちゃとして見えた。近代戦は人間をおもちゃとして扱うがそのメカニズムを作りあげたのはかれ自身である。ここで、肩身をせまくしているのはむしろ人間の方なのである。鎮魂の意図ではじめられたヴォネガットの小説はこの基本的なグロテスクさを反映してコミックなゆがみを帯びるにいたる。

ビリーは連合軍による爆撃のあと、廃墟の町をさまようがその彼は月世界を探検する宇宙人にしたてられている。そしてこの風変わりな月世界探訪から帰ってきたものにとって、「地球人の価値体系は二度とふたたび同じものに見えることはない。」ドレスデンを焼いた火は摂理、中心的価値体系を焼きおとしそしてビリーの内面でも何かが確実に焼けおちた。生きるためにかれは新しい「嘘」を発明しなければならない。トラルファマドール星人がかれに与えた福音は人間が落ちこんだ因習的な時間のカテゴリーからの解放を骨子としていた。すなわち死の観念の消失 (... when a person dies, he only appears to die. He is still very much alive in the past, ...),

幸福な瞬間への注視 (We spend eternity looking at pleasant moments) である。現代史の暴力とおびただしい死に直面するべくそれはあまりにささや

かな、ヴィジョンといえるかもしれない。むしろヴォネガットは今日、幸福の処方せんはどこにもないことを示唆しているのであろう。

And somewhere in there was springtime.

Slaughterhouse-Five の終章はフレーザー的シンボルにみちた世界である。廃墟のあとにも春は甦っていた。自然のサイクルは死の時をすぎて再生へ歩みよっている。みずみずしい自然の風景の中でただ一つの人間の要素はカンオケをのせた馬車であるがそれは緑にぬられてあった。ここでは死は自然のジャンカンの当然の節の一つにすぎず、それはもはや悲しむべきことではない。人間にとって自然が鏡であるならば、かれにとって最も大切な教訓はこうした自然のサイクルに無理なく重ね合わさるような生とは何、死とは何かを考えることであろう。その他の事はすべてイリュージョンであり、Cat's Cradle であり、嘘であるというべきであろう。ヴォネガットはおそらく「真に重要な問題は一人の人間の生死である。」というあの基本的認識へと呼びかけているのである。いうまでもなく、人間が再び新しい嘘につられて悲惨と愚劣をくりかえさないという保証はない。としたら、この世界で最良の方法は、生きつづけること耐えること、かもしれない。そして「リア王」の人物のように、「苦しめる方がもうたくさんという位、がんばってやる」ことかもしれない。ヴォネガットが復活の神話ともいうべきこの終章を、不可解な鳥の鳴き声で閉じていることは興味深い。この天からのメッセージはこうである。“Poo-tee-weet?”

バーナード・バーゴンドはアメリカ小説の特質を、圧倒的な全体の圧力にたいする個の抵抗と指摘し、その自ギャクからくるユーモア、意識的なコッケイさをコミック・アポカリプスと名づけた。とすればヴォネガットは Cat's Cradle, Slaughterhouse-Five の二作によってこの伝統の上質の部分に属する作家であることを証したといえないだろうか。